

西脇市学校部活動地域展開に係る講演会及び説明会の記録

【日時、場所等】

- 開催日時 令和7年4月20日（日）14:30～16:15
- 開催場所 西脇市茜が丘複合施設みらいえ多目的ホール
- 参加者数 100人

【内容】

1 開会（事務局）

本日は、中学校部活動の地域展開に関する講演会・説明会にご参加いただき、誠にありがとうございます。

なお、本日の講演につきましては、動画撮影もさせていただき、後ほど公開する予定としておりますことを申し添えいたします。

それでは開会行事に入らせていただきます。

まず、開会にあたりまして、西脇市教育長の遠藤一博がご挨拶を申し上げます。

2 教育長あいさつ（遠藤教育長）

本日は、部活動の地域展開って？という「？」もついている素朴な疑問、部活動の地域展開って何？という、この素朴な疑問を切り口としまして、青少年の文化スポーツ活動のこれから、そして中学校部活動の地域展開を踏まえてという演題のもと、兵庫教育大学の森田博之先生にご講演を賜ります。

今日この会場には、本市のスポーツや文化の振興にご尽力いただいております各関係の皆様方、市内の小中学校もしくはこども園にお子様を通わせていらっしゃる保護者の皆様方、それぞれの関係学校園の教職員の皆様方、地域市民の皆様方、それぞれのお立場からご参加いただき、本当にありがとうございます。

さて、ご存知のとおり、これまでは中学生のスポーツや文化芸術活動の機会が、中学校においては部活動という名のもとに提供してまいりました。しかし近年、少子化の進行により学校の小規模化が進み、これまでのように学校独自で、学校単位で部活動の運営を行うことが非常に厳しくなりつつあります。こうした状況の中で、これからの中学生が継続してスポーツや文化芸術活動に取り組むことができる環境を、この西脇市においても整備していくという課題が生じてきております。

今日、森田先生にはご講演を通しまして、方向づけ、または道

筋、ヒントをいただけるものと期待しております。どうぞよろしく
お願いいたします。

それでは今から始めてまいります。

どうぞ皆さんよろしくお願いいたします。

3 講師紹介（事務局）

講演に先立ちまして、本日の講師である森田啓之先生をご紹介します。
させていただきます。

森田先生は、兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授として、体
育スポーツ領域において、子どもの健全な育成に向けて学校と地域
がより良い関係を築いていくことが必要であり、両者を視野に入れ
た実践的体育スポーツ論を展開したいと活動を進められていらっし
やいます。

昨年度には、西脇市学校部活動地域移行検討会議の委員長とし
て、西脇市の休日の学校部活動の地域展開に関する基本方針の策定
にご協力をいただきました。その他、兵庫県部活動地域移行検討・
地域移行推進会議の委員のほか、県内多くの同様の推進会議・検討
会議の委員としてご活躍されていらっしやいます。

本日は「青少年の文化スポーツ活動のこれから 中学校部活動の地
域展開を踏まえて」と題してご講演をいただきます。

それでは先生、よろしくお願いいたします。

4 講演（森田先生）

ただいまご紹介にあずかりました、兵庫教育大学の森田と申しま
す。一時間ほど、お話にお付き合いいただけたらと思います。

タイトルにございますように、地域展開をご理解いただくことは
当然ですが、やはりこれからの先の明るい未来、決して暗く捉える
のではなく、明るい未来に向かって、我々、特に大人はどうすべき
か、というあたりをぜひ考えていただければと思います。よろしく
お願いします。

[P 2]

今日の内容ですが、メインは3番です。お手元にもあると思いま
すが、1つ目、2つ目は3つ目を考える上で、やはり理解していただ
きたい部分となります。

まず1つ目。今の中学校の部活動はどうなっていくのか。黄色で
示しておりますが、もう学校に残したくても残せない状況になって
いることをまず確認していただきたいと思っています。

2つ目。今日の講演会のタイトルにもなっていますが、かつては
数年前まで「地域移行」という言葉を使っていましたが、「地域展

開」ということに昨年、国は表現を変えました。その違いの部分。もう1つは、これもよく耳にしていると思いますが、「地域でクラブを」。地域のクラブとはどういうことなのか、というあたりを考えていただけたらと思います。さらに黄色のところに書いていますが、地域で必ずしもクラブ、今の部活のようにみんなが集まってやるクラブだけでなく、すでに今、地域でいろんな市や団体がやっている教室なども含めて、地域の活動として広く理解いただけたらというのが2点目です。

3点目。中学校年代、特に小学校から含めてですが、この文化・スポーツ活動が変わっていくというのは正直、他人事の表現なので、それをある意味どう変えていくべきなのかという観点でお話をさせていただけたらと思います。よろしくお願ひします。

[P 3]

最初に、部活動のことです。ほとんどの大人は部活動を当たり前のように経験してきたと思います。細かいところは文章で書いているとおりですが、一つは赤で書いたように学校教育の一環として、学校の中で面倒を見てきたというのが示されているところです。ただし、下に黄色であります、わかりやすく言えば、時間割にはなく、何時間やりましょうという決まりはない。ここが特徴です。国語が大好きだという子どもがいても百何十時間しかない。体育が大好きだと言っても90時間ほどしかないと決まっていますが、部活動に関しては、学校で面倒を見ますよと言いつつも、その部分については何もない。これ以上やりましょう、これ以上やってはいけませんとか。そういう意味で、この曖昧な形の中で、ずっと日本はこの制度を継続してきて、それが良くも悪くも日本の部活動の文化です。したがって、本来は部活動への参加は先生も生徒も任意で、やるやらないは自由ですが、これもいろんな事情で、ほぼ強制加入のような時代もあったし、今でもそういう地域もあります。まずここを頭に入れておいていただけたらと思います。

[P 4]

そんな部活動は、ほぼ戦後から約70年になりますが、真ん中の黄色の部分。先ほど教育長からもありましたが、一つは少子化の中で、今までのやり方では対応できなくなってきたということ。右側の黄色い部分ですが、学校自体が様々な課題を突きつけられ、大変になってきたということと同時に、部活対応による教員の過重労働とその疲弊と書いています。刺激的な言葉ですが、世の中自体が働き方、人間らしい生活をする上で、例えば昨年、運送業界でもそうでしたし、一般的な企業でもこの問題は非常にクローズアップされていることはご存知だと思います。そういう意味で、この二つが相

まって、改革をせざるを得なくなっただのが正直なところでは。国は下にいくつかあるように、①から④、十年ほどの間に色々なことをやってきましたが、今回本格的に、刺激的な提案をしているとご理解ください。

[P 5]

ここも形式的なのでさらっと行きますが、大きく出てきたのは2023年4月からの話です。ちょうど令和7年ですので、ここにありますが、「改革推進期間」といって、今まで学校だけで閉じてやっていたものを、少しずつ地域に開いていくことを自治体で検討してください、というのがこの3年間です。昨年の夏、本当は来年度、2026年度からどうするのかということ国で検討でも議論がされ、2026年度からは平日についても推進していく方法も出てきました。これからの来年度からの6年間を「改革実行期間」としています。細かいところは避けますが、一番下にあるように、この流れはもう戻すことはありません。今よく「結局できなくなったらまた学校に戻るのでは？」という言い方をされる方もいますが、正直、国はもうそこまで考えていません。今までなら、ふわっとした政策を部活動に関して出していましたが、今回はもう後戻りできない覚悟でやっていると文章を読みながら私は思っていますし、世の中自体がそう行かざるを得なくなっているとご理解ください。

[P 6]

これは昔からあり、ここにお集まりの皆さんも経験しているでしょうが、部活動自体が、子ども・生徒の立場から見ると、専門的な指導が受けられなかったり、逆に先生の熱心さは良いことですが、熱心さ余って過剰すぎるという問題も含め、「部活潰け」という表現が出されたり。あるいは、様々な、例えばソフトボール、バレーボール、サッカーなどをやってみようという中にも、かなり本格的にやりたい子から、少し体を動かす程度で、たまたま一緒に上級生・下級生とやりたいなあという子まで、思いは正直あります。その中でいつもボタンの掛け違いが起こったり、極論すればいじめに発展する場合もあったり。さらに最近では少子化で、希望する種目や分野の活動ができなくなったり、チームが組めなかったりということが指摘されています。

一方で先生方から見ると、一つ目は、先生方は部活指導のために採用されているわけではないので、学校の中で、ある意味、どの部活をやってもらうかを校長先生等が考えながら、運良く自分が好きで専門的にやってきた種目を指導する人もいれば、そうでない場合もあります。その中で正直、私、今年62歳になりますが、私より上の方々はわかると思いますが、昔はこんなに部活動に親は出てきま

せんでした。もっとほんわかしていました。しかし今は世の中自体が、部活動に関して非常に要求が高くなってきています。「前の顧問は良かったのに、今度の先生は頼りない」などと、遠慮なく保護者が言っているのを耳にすることもあります。一生懸命やっても人間には限界があるので、子どもは可愛いけれども精神的な負担もあります。

そして、子どもの部活漬けの弊害もありますが、先生方も。私も最近附属幼稚園の園長をするようになってからは大学のクラブにはほとんどタッチしていませんが、20代から約30年弱、ソフトボール男女と卓球部に関わってきました。役員もして、夏休みはほぼ家にいませんでした。そのこと自体、家族は諦めに変わっていくのですが、実際、授業を準備する時間が絶対的に確実に削られます。先生方も一生懸命、影響を及ぼさないようにやるのですが。一番下、解説はしませんが、ご家族への影響というものは当然あります。学校の先生も一人の生活者ですので、見ていただいたらわかると思いますが、1993年、30年以上前に書かれた本に、すでにこういう問題が指摘されています。一方ですべてではありませんが、まだ改善されていない現状もあります。

おそらく家族の立場からすれば、こういうことは今も続いているでしょう。これが学校の先生でなければ、自分で会社とは別の形で、趣味でやりたいことをやりたい範囲でやれば問題ないですが、学校の場合、時間割にはないけれど学校の先生がやるもの、という形で国民が理解し、それをやらない先生は先生ではない、というぐらいの文化がずっと形成されてきた中で、「今度の先生は部活に熱心ではない」という烙印まで押される現状もあります。

しかし今お分かりのとおり、こういう時代が良いわけではありません。かつて学生にもよく見せましたが、あるエナジードリンクのCM「24時間戦えますか」。これをわかっている方は結構な年代だと思いますが、その時代なら、全ての会社員もそうでした。「亭主元気で留守がいい」というCMも流行った時代ですが、今の時代にそれを適用させようとするのは、昔はそれが一つの国や社会の動き方でしたが、今はそうではないことも頭ではわかると思います。

[P 7]

正直なところ、会場にお集まりの方の中にもあると思いますが、やはり抵抗感も当然あります。「すごくいい部活動を手放していいのかわか」 「部活で光を放つ子もいる」 「すべての子が対象になって部活ができる」 「学校の知っている先生が日常的に指導している」

「学校の外では十分な教育はできないのでは？」 という人もいます。私はここには疑問ですが。地域で素敵な指導をされている方は

たくさんいます。学校だから絶対安心ということもない気がします。また、費用や保険の問題なども、学校でやることで、ある意味優遇されてきたことは事実です。

[P 8]

研究者も、世界的にも評価していますが、特に運動部・文化部を含め、これは日本の特徴として重要なので、なくすことには慎重であるべきだという意見もあります。

[P 9]

とはいえ、ここまでの話をまとめると、1993年の書籍の引用もしましたが、基本的にはもっと前から、部活動は30、40年前から様々な指摘がなされてきました。下に書いてあるように、解決するために国も先生方も県も市も色々な対応をしてきました。先生の負担を減らすために外部指導者をお願いしたり、やりすぎを抑えるためにノー部活デーを作ったりしたのがここ10～20年の話です。

しかし、これはあえて言いますが、私も含め、そういう対症療法ではもう立ち行きません。この過剰な部活動を、現場の先生方、親御さん、子どもたちが変えて直していくことができなければ良かったのですが、一方でご存知のとおり、大会がどんどんでき、日本一を目指してみんながそこに向かい、一喜一憂する社会がある、という枠組みの中では、一部の現場の人たちの一生懸命だけではどうしようもありません。そこで国は思い切って決断をしたと捉えてください。

[P 10]

先ほどもありましたが、少子化の問題で、もうのっぴきならない状態になっていること、同時に働き方の問題も含めて。

[P 11]

そういう中で、一方で先生方に理解いただきたいのは、今の部活動を地域で引き受けるのは無理だ、ということです。端的に言えば、そんなことは考えなくていい。誰が週5回も面倒を見る社会人の大人がいますか。学校の先生も、教育の範疇だからやっているだけで、それ以外の方が時間的・労働的に関われるわけではありません。だからこそ一番下に水色で書いていますが、今の部活動をそのまま地域にスライドして実施するのではない、ということをも頭に入れておいてください。もっと言えば、今後は風景が変わる。その覚悟を国もしていますし、皆さんも私もイメージを変える必要があるでしょう。

[P 12]

一方で、当たり前ですが、「学校の先生になんとか引き継いでもらえないか」という意見もあるでしょうが、これについても、他の

職種も含めて。仮に、他の自治体で「学校の先生がやりたい人はやれるようにします」というのが良いように出ていますが、企業に勤めている方はわかると思いますが、それを兼職兼業としてやりたい人だけ認めても、本務の時間プラスアルファになります。そうになると、労働管理・健康管理のために雇う側は適切に時間管理をしないとイケません。時間外が40時間を超えないようにとか、80時間を超えたら過労死が心配されるとか、世の中に出ているとおりです。部活動を熱心に行っている先生、役員をしている人は、これから5月の総体時期など、役員も指導もすれば月100時間の時間外労働になります。どう考えても会社勤めではありえません。

ではどうすればいいか。

[P 13]

部活動の地域移行・地域展開は、今の時代にはもう必然と理解してください。

真ん中にあるように、中学生の文化・スポーツ活動を学校教育の一環として先生に世話になり、学校教育としてやってきたことの限界がきています。じゃあどうすればいいのか。一番下ですが、「誰もが無理せずに支えられる体制」を作るしかありません。これでまた地域の方のどなたかにすごく負担がかかり、体を壊すようなことがあってはなりません。今までは学校の先生と一部の熱心な地域の方のサポートで継続してきましたが、誰かが無理をすればどこかにしわ寄せがいく。この「無理せず支える体制づくり」をどうするかは、それぞれの市を含めた大人の責任でしょう。地域総動員で考える必要があると捉えてください。

[P 14]

保護者の皆さんからすれば、様々な不安があるでしょう。「部活がなくなったら、夕方早く帰ってきて、ゲームばかりするのでは」「夜、繁華街をうろつかないか」など心配される方もいるでしょうし、「高校入試に部活が影響するのでは」という心配もあるでしょう。高校入試については、これも都市伝説的なものですが、特殊な入試を除けば、県立高校の通常の入試で部活動は評価対象になりません。しかし「部活をやっていたらマイナスにならない、プラスになる」みたいに思っている人は未だにたくさんいます。それは無いことですが、まさに都市伝説のように日本の中にある続けるのも現実かもしれません。これについては、しかるべき部署が話をすることも必要かと私は思っています。

あと3つ目。費用負担です。学校部活でも部費はありましたが、指導料はかかっていませんでした。地域の方にお世話になるなら交通費ぐらいは最低限、あるいは立ち会ってくれるなら少しは謝礼

を、という話は当然出てきます。その費用はどうするのか。また、西脇市のように交通アクセスが十分でない地域ではどうするのか、という問題も当然ありますが、市として可能な形で何をすべきか検討されているはずだのご理解ください。

さらに学校の先生方、関係者の方々の心配・不安も正直あります。運動部活動について、週に4回程度体を動かせば、体力テストの数値も維持されやすく、体力低下に歯止めをかけることも事実です。また、部活動で顧問の先生が「そんないい加減なことしていたら試合に出られないぞ」と言うことも含め、生徒指導的な役割、生活指導も部活動の先生が担ってきました。それがなくなると、部活を通じて子どもたちを育ててきた部分は、どうなるのかと先生自身も心配しています。学校の先生にとっても大きな転換期です。部活がなくなる分、本来の教科や行事などで上級生・下級生の関わりを作ったり、生徒との関係性を作ったりすることを、今後別途考える必要がある。それぐらい、多くの人にとって大きな変化だと捉えてください。

[P 15]

2つ目。地域移行と地域展開。今回「地域展開」と書いたのは、移行だとそのままスライドするイメージを持つ人が多かったので、「違いますよ」と。地域に「開いていく」意図で「地域展開」と言ったのです。そこで先ほど冒頭で言いましたが、「地域クラブ活動」という言い方が多く出てきます。

次、この黄色の部分だけ見てください。今までは学校教育の一環として学校が管轄していましたが、今後は地域展開後の活動は、学校はもちろん施設を貸したり、市の備品を使ったりするので関わるでしょうが、管轄外になります。先般、落雷で部活動の子どもが被害を受けた事故がありましたが、あれは学校の部活動なので学校が対応しました。今後、地域の活動になれば、例えばスポーツ少年団のように、学校は基本ノータッチで、その活動団体が責任を持つ形になります。ここが大きな違いです。

[P 16]

国の資料で小さくて読みにくいですが、左の水色が我々が経験してきた「部活動」。下の緑色が「地域連携」。これは地域の力を借りて、部活動の範囲内で学校の負担を減らしつつ、内容を充実させるものです。

今後は右側。令和4年の資料なので「休日の」とありますが、地域クラブ活動はこの黄色っぽいオレンジの部分になります。学校と連携して行う地域クラブ活動は、法律上は「社会教育、スポーツ・文化芸術活動」です。学校が管轄して調整するものではなくなりま

す。

しかし、制度が大きく変わる中で、いきなり全てを変えるのは難しい。そのため、当面は地域の実情に応じて「併存」する形、つまり学校部活動と地域クラブ活動が両方存在する時期がある、とまず捉えてください。

[P 17]

今は学校管理下で指導を手伝っている方もいるでしょうが、それは校長の管轄下です。最終的には国は平日も含め、学校管理外の活動にする意図です。

[P 18]

それを文言にしたのがこちらです。兵庫県の他の市町でも、当面はこの「地域連携」を拡充し、部活動指導員や外部指導者の助けを増やして、ここ数年対応しようという動きもあります。しかし、これは全く位置づけが違うので、緑色の地域連携をいくら増やしても、右側のオレンジ色の地域クラブ活動にはおそらく移行しません。ここには大きなレベルの違いがあります。本当に大変なことをこの時期にやることになりました。それに向けて考えていく必要があるとご理解ください。

[P 19]

地域クラブの中身について。例えば、西脇中学校のサッカー部や吹奏楽部を、地域に全く同じ形で一つ作る必要はありません。西脇中と西脇南中などが一緒になって一つという形も考えられます。それは学校単位とは厳密には言えませんが、大人には分かりやすい説明です。

また、中学生だけがやるクラブを作る必要もありません。大人が平日の夜にやっている合唱団に中学生が入ることも、小学生のスポーツ少年団に中学生が入ることもあり得ます。地域の実情と資源によって違いが出るので、地域で柔軟に考えていく必要があります。

[P 20]

同時に、新たな地域クラブに求めること。

1つ目、ただ働きの指導は、一方では良い面もありますが、独善的な指導や運営になる可能性もあります。「ボランティアだから好きなようにやらせろ」という声も聞きます。しかし、ボランティアであっても相手に受け入れられる活動をするべきです。最近是有償ボランティアも増えており、全く無償というのは考える必要があるかもしれません。

2つ目、「地域に出したら勝利至上主義になるのでは」という心配もありますが、そうならないように考えるべきです。

[P 21]

県下の自治体のパターンについて。

パターンAは左側の水色（部活動）に緑（地域連携）を加えて、休日の負担を減らす形。

パターンBは、休日は完全に地域に移し、平日は当面部活動を継続する形。西脇市は当面パターンBで進むと思われれます。この移行期には、平日と休日の指導者が違うことによる課題も考えられます。子どもは意外と冷静に対応しますが、大人の方が難しい。学校の先生は休日見られなくてストレスが溜まるかもしれませんし、地域の人でも遠慮するかもしれません。お互い遠慮しつつ、良い関係で子どもを複数で育てることが当たり前になれば良いのですが、これまで指導者は「自分のチームを作りたい」という人が多かったのも事実です。文化部も同様でしょう。そうなると、分担が難しくなる可能性があります。

パターンC。「コベカツ」と呼ばれる神戸モデルは、平日休日含め全て学校外の活動にすると宣言しました。阪神地区の市町もそれに追随する形で、令和8年度や9年度、10年度にそうすると表明しています。どのパターンを選ぶかは、地域の実情によります。西脇市は受け皿の問題など、慎重に進める必要があるという状況でしょう。

[P 22]

これから学校から地域へ活動の場が移る上で、我々大人がどう変わるか。黄色で書いたとおり、我々が経験してきた昭和型、平成初期の部活動は、今後学校から消えていきます。そのイメージを持ち続けるとブレーキにしかありません。

真ん中に書いていますが、日本では7～8割の生徒が部活動に参加し、平日休日問わず特定の種目を一つ選び、対外試合に向けて長時間練習する。それが中学生の平均的な過ごし方であり、当たり前だと思ってきましたが、それを一度冷静に脇に置く必要があります。良さはありましたが、引きずると次へ進めません。

部活動の良さはありますが、ほぼ全員が一斉に画一的に、ある意味強制的な雰囲気で行ってきた。この点も冷静に評価する必要があります。

[P 23]

最近の高校の先生の本で、Z世代について記載した部分があります。赤字のところですが、生活に必要な時間（食事、睡眠など）と学校を除いた自由な時間の使い方が変わってきています。昔は放課後部活、帰宅後テレビや塾、習い事、翌朝は朝練、というのが平均的な姿でしたが、今はデジタルの発達もあり、SNSで自己表現したり、学校にない種目の活動をしたりする子もいます。多種多様な

関わり方をまず認める冷静さが必要です。

しかし、私も含め、部活の研究をしてきた者には、「サークル」というと昭和のイメージで、なんとなく緩い活動に感じてしまいます。「あれは部活じゃない」と言う学生もいます。それぐらい、週4～5回、試合に向けて厳しくやるという部活動のイメージが我々に深く根付いているのです。

[P 24]

部活動の「光」の部分、良いところは継承すべきですが、「罪」「影」の部分は見直す必要があります。

例えば、休む自由は保障されていたか。顧問はそう思っていなくても、生徒は先生や先輩に許可を得て休むのが当たり前だったかもしれない。大学でも、強豪校出身の子は「先生、今日は休ませてください」と殊勝に来ますが、「勝手に休めばいい」と言うと驚かれます。「中高では報・連・相が絶対で、無断欠席は悪だった」と。おかしいと思いませんか？放課後の活動なのに。許可は不要でも連絡はした方が良くないかもしれませんが。

また、「部活に入ったから習い事をやめた」という経験。両方やりたい子もいたでしょう。「部活動は家族総出で頑張るものなのか」。今でも「子どものために家族旅行は控えて」「応援に来て」と顧問に言われる、という相談を受けます。親御さんも、子どもにマイナス影響が出るのを恐れて言えない部分もある。これから作る地域の活動は、そうならないようにする必要があります。

[P 25]

国の調査（潜在的ニーズ）では、部活に入っていない子の理由として、「興味のある活動がない」「自分のペースでできるなら」「練習日数・時間がちょうど良いなら」「友達と楽しめるなら」などが挙がっています。部活動の良さはありますが、時代の変化、子どもの変化に対応しきれない弱点もありました。それを補うようなものができればと思います。

[P 26]

多様な活動の例です。

ある子は平日の夜に週1、2回運動や英語、休日にまた運動。ある子は、平日は塾や習い事、休日にじっくり運動。ある子は平日夜に楽団や合唱団、休日は別の運動。逆も然りです。また、学校終わって放課後にそのまま活動できる種目や人材がいれば、それも良いでしょう。ただ、学校の先生がそのまま担当するのは難しいので、地域の方がその時間帯に関われるなら無理のない範囲で可能かもしれません。こういう多様な形が今後見られることに対し、許容し、寛容に認めていくことが必要です。子どもは柔軟なので、なんとで

もなるでしょう。なぜなら、これからの小学生は今の部活動を知らないからです。新しい形を大人がどう作っていくかが重要です。

[P 27]

地域展開の良さについてですが、これまで学校中心だったため、小学校時代の地域の活動が中学校、高校で途切れ、社会人になってまた地域に戻るという「中抜け」状態がありました。活動が盛んな時期に断絶がある状態でした。これを生涯スポーツ・文化・学習という観点から、各市町で考え直す機会になります。

中学校の問題ですが、この機会に市として、どのような文化、スポーツ活動を展開すべきか、どんな子どもたちを育てたいか、大人自身が考える作業をしていただけるとありがたいと思います。

[P 28]

この大転換期に、今までの当たり前が通用しなくなる中でどう立ち向かうか。「どうなるんだ」「市はどうするんだ」と批判ばかりする人もいます。まず、今後変わっていくことを前提に、大人自身が他人事ではなく、それぞれの立場で「自分ごと」として、自分にできることは何かを考えていただきたいと思っています。それが大人の責任です。

厳しい言い方をすれば、こんな過剰な部活動にしてしまったのは大人です。昭和40年代はこんなことはありませんでした。大会も市や県レベルで十分だったのに、大人が「子どものため」と言いつつ大会を増やし、企業も乗り、巨大化し、一人一人の思いが置き去りになるほどの大きなうねりになりました。自分のペースで活動できない状況になってしまいました。だからこそ、もう一度、子どもたちのために大人がどうするかを考えてほしいです。

行政については、この後説明があると思いますが、西脇市の当面の進め方を考えておられます。市民一人一人も、できることは何か考えてください。ある地域では、指導は不要、見守りだけでいい、という声もあります。事故対応などは、保護者が行う場合もあります。正解がありませんので、それぞれの地域で工夫してほしいと思います。

学校の先生方は、部活動がなくなる、あるいは形が変わる中で、学校の姿がどうなるのか、部活動で学校を律してきた側面からの脱却も考える必要があるでしょう。

[P 29]

地域展開という仕組みと同時に重要なのは、文化・スポーツ活動の「価値観」です。ここを変えないと、大混乱が起こると私は思います。これを機に、新しい文化・スポーツ環境、指導者の質ややり方、親の関わり方が必要です。もちろん、将来それで身を立てる覚

悟のある子は、専門の場で家族としてしっかりやればいいのです。市がレベル別のクラブを作ることもあります。

大事にしてほしいのは、どこまで行っても「遊戯性」です。日本語では、「I play tennis」「I play the guitar」を「テニスをする」「ギターを弾く」と訳しますが、本来は「テニスで遊ぶ」「ギターで遊ぶ」です。「上手になりたい」という気持ちはあっても、その「遊ぶ」部分の指導が必要です。

教育も大事ですが、地域の素敵な指導者は「人間形成」とか「教育」とかあまり言いません。「友達のために、自分が楽しむためにも、やってはいけないことはあるよね」それだけで子どもは十分わかるはずです。日本は妙に「感謝、感謝」と言いますが、あれは大人の押し付けです。子どもはそんなこと、思っていないわけではないでしょうが、必ずしも常に口にするものではありません。小学生がそれを言うのは、大人が良かれと思ってコントロールしているようにも感じます。

これからのスポーツ・文化活動を考える上で、今までは赤で書いたような効率の良い生産に耐えうることや、言われたことを忠実に熱心にやり抜くことが求められました。悪いことではありませんが、今は違います。デジタル化も進み、効率性より「創造性」が重視され、結果（プロダクト）だけでなく「プロセス」をどう考えるかが求められています。スポーツ指導も文化活動も、そういう形で見直す必要があると私は思います。

[P 30]

今は、西脇市の地域力が試される大きな転換期です。遠慮なく言いますが、どうしようもなくなった場合、「誰もおらん、面倒を見る人はおらん」という地域が出てくるかもしれません。国は言いませんが、私は言います。その地域の大人が「情けない、ごめんな」と謝るしかありません。誰もが無理せずやれることはこれぐらいだ、と。今までは学校が全部やってきたことを、それをみんなでシェアし、やれる範囲でやって、新しい活動も提供できる範囲でやって、それでもここまでだ、と。それが大人の責任です。もちろん国はそうならないように時間をかけて考えてくれ、と言っていますが。それが今回の一番のポイントです。

ぜひ今日の機会に、今まで活動してきた団体の方々も、一緒にやっていただけたら十分ですし、技術指導はできなくても見守りやサポートができる、という方も含め、様々な人材にお世話になればありがたいと思います。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

4 説明（事務局）

本当に衝撃的な言葉が森田先生からも出てきました。例えば、「もう今までのような部活動は今後見られなくなる。そのイメージを捨てるべき」と。私自身もこの立場にいて、他府県・他市町を見ましても、この一年で部活動改革の波に加速感が増してきました。このあたりも踏まえ、本市の動きを皆様と確認し、共有し、前を向く機会になればと思います。よろしく願いいたします。

[P 2]

少子化が進んでいるという全国の動きがあります。

[P 3]

西脇市は、パッと見ると部活動の数は減っていないように見えますが、実は現場の先生方が粘りに粘って、部活数を減らさないように、廃部にしないようにしてきました。しかし今、西脇市内も生徒数が減り、学級数が減り、先生数が減り、顧問の先生が物理的にいなくなっています。できるだけ一つの部を複数の顧問で見たいのですが、副顧問は兼任してもらったり、ほとんど一人で指導してもらったりしながら、なんとか部活数を維持しているのが現状です。学校の小規模化、学級減が西脇市にも波及していることをご確認ください。

[P 4]

学校の働き方改革にも目を向けなければなりません。下から2行目に「働き方改革が必要なのは、先生を楽にするためではありません。学校が子どもたちの未来に直結する場だからです」とあります。

[P 5]

下から4行目には「学校の働き方改革は、これまでの先生の働き方を見直し、毎日元気に子どもたちの前に立って、未来につながる力を育む教育を行うために必要なものなのです。先生には、授業やその準備をはじめとした、先生にしかできない教育活動に全力投球していただきましょう」。そういう方向です。教職員が子どもたちと向き合う時間を確保し、教育をより良くしていこうということです。

[P 6]

もう待ったなしの状況下、本市でも主な期待と課題をまとめています。

[P 7]

去年1年間かけ、西脇市としても学校部活動地域移行検討会議を年間4回開催し、有識者15名（学識経験者、学校関係者、スポーツ・文化関係代表者、保護者代表者等）と教育委員会9名のメンバ

一で基本方針をまとめました。これは「休日」の部活動地域展開についてです。まず西脇市としては、休日の地域移行・地域展開から始めていきます。

[P 8]

今後のスケジュールです。

令和7年度は、休日の部活動について、まずは陸上競技と剣道を対象にモデル事業を得て実施します。前例がないことに日本中が取り組んでいます。

令和8年度には、できる範囲で拡充したいと考えています。

令和9年度には、総合体育大会（6月下旬～夏）や、文化部のコンクール（夏）などを節目として、全ての部活動の「休日」の地域移行を目指します。さらに言えば、休日の部活動は廃止するという方針です。「平日」の部活動は当面存続しますが、徐々に平日も移行していきたいという意向を斜めの線で示しています。

[P 9]

例えば令和7年度入学生（この4月に入学した子たち）は、通常とおおり部活動に入部し、2年生も同様、3年生の最後の大会まで上級生と同じように活動は保障されます。その一つ下の学年から、休日の部活動がなくなります。そして令和9年度には完全に休日の部活動は廃止という動きです。学年によって状況は異なりますが、これが今後2、3年後の中学生の部活動の形になります。

[P 10]

これが最終ゴールです。

学校教育から完全に社会教育へ移行します。森田先生の話にもありましたが、今までは学校管理下でしたが、最終的には学校管理外の活動になります。全て社会教育という捉え方です。

実施主体は「地域クラブ」。運営団体は「総合型地域スポーツ・文化クラブ等」の設立を目指します。

指導者は地域の指導者、そして希望する教員のみ。教員の場合は兼職兼業制度を活用します。

参加者は校区の枠にとらわれません。自分の学校にやりたい競技がなくても、市内の多様な種目・協議を選ぶことが可能になります。

活動場所は学校施設や地域の諸施設を利用できるように進めます。

費用負担については、受益者負担が原則となります。全国的にそのような動きです。

スポーツ安全保険等への加入により、ケガや事故等に備えます。

[P 11]

よくある質問です。

地域クラブが実施主体となり、それを統括する運営団体（総合型クラブ等）の整備を検討します。令和7年度のモデル事業については、市教委が運営団体として動きます。

適切な指導として、体罰・ハラスメント根絶のため研修等を実施し、生徒・保護者とのコミュニケーションを確保します。また、適切な休養、過度の練習防止のためガイドラインを設定し、遵守させます。

活動内容では、競技・大会志向（アスリート志向）から、レクリエーション的なものまで、多様な目的を持ったクラブができればと考えています。

[P 12]

活動場所・送迎について、活動場所への移動が必要になる場合があります。施設使用料が発生する場合もありますが、減免等を検討します。

会費等、受益者負担が原則です。ただし、令和7年度の実証事業については、指導者謝礼、施設利用料、保険料等は、市が負担します。経済的に厳しい家庭への支援策も検討します。

[P 13]

ケガや事故に備え、スポーツ安全保険等へ加入します。

公式大会等への出場については、西脇市は休日の移行から始め、平日は部活動が存続するため、従来とおり中体連等の大会には学校として選手登録・申し込みが可能です。地域指導者と連携して取り組みます。

地域展開の順番について、近隣には一気に部活動を全廃し、地域に移行する自治体もありますが、西脇市は休日の移行から始めます。また、まずは現在学校に設置されている部活動から移行を進める方針です。ご理解をお願い致します。

5 質疑応答

[質問者 1]

小学校3年生以下なら地域展開が完了しているかもしれませんが、小4、小5、小6あたりが一番曖昧で分かりにくく、不安かと思えます。この子たちが中学に入る前に、例えば小6の子が入学する時点ではまだ部活があると思いますが、その時、「この部活は3年間あります」「この部活は中2から休日は地域展開します」といった説明を、全ての部活について事前に聞くことは難しいでしょうか。

[事務局]

スケジュールは、説明資料9ページのとおりです。

基本的には休日については令和9年度の途中から地域へ移行します。どのクラブが令和8年度から先行するかについては、地域で指導いただける方がいるかどうかも含めて調整させていただきます。

[質問者1]

もし可能なら、「3年間部活があるなら入りたい」「1年生の夏で終わるなら、同じ競技を地域のクラブでやりたい」と、入る前に選べると保護者は安心できます。2年生の途中でクラブチームに移るのは、人間関係もあり非常に難しいと思います。入る前に説明があれば助かりますが、難しいでしょうか。また、現在の中体連ルールでは年度途中の移籍ができません。中2の夏で部活動が終わると、2学期、3学期は大会に出られず、中3まで半年以上ブランクがあって、ようやく1、2か月試合をして終わる可能性もあります。中体連のルール、年度途中の移籍が可能になるような変更はありますか。

[事務局]

中体連の選手登録ルールですね。西脇市の場合は休日の地域移行であり、平日は学校に部活動が残るので、学校での選手登録は継続されるという理解しています。

[質問者1]

休日もいずれ完全に移行する時が来ると思います。その時、小4、小5の子たちが中学生になった際に、地域にチームがあれば良いですが、もし希望する競技のクラブがない場合も十分にあり得ます。今の部活動全てが地域クラブになるとは限りません。その場合、中1や中2の夏で引退する子が多く出るとはと思いますが、市として各競技のチーム作りを手助けするようなことはあるのでしょうか。それとも自然発生的にクラブができるのを待つしかないのでしょうか。

[事務局]

指導者の確保について、我々も全力で確保に努めていますが、ご講演にもあったとおり、現場の先生に責任を持って移行してもらうのは、負荷を考えると難しいのが現状です。地域においても受け皿が十分かという点、正直不足感は否めません。

そのような中で、子どもたちの体験格差をどう解消するか、全力で考えております。人材派遣や新たな人材募集もあるかもしれませんが、しかし、いずれも財源の問題があり、保護者の皆様にご負担いただけるかという問題があるため、腹を割って話さない先が見通せない、というのが偽らざる心境です。

いただいたご指摘を踏まえ、持続可能な仕組みを今後加速させて検討しますので、ご協力、ご指導をお願いします。

[質問者 1]

中体連のルールで、現在、各学校にその競技の部活があれば、地域のクラブチームからは大会に出られないというルールがあります。これは今後変わる可能性はありますか？例えば西脇南中にサッカー部があれば、地域のサッカークラブチーム（として中体連の大会）には出られない、というルールだったと思いますが。

テニスですと、西脇南中にソフトテニス部がある場合、地域のソフトテニスクラブを立ち上げて、そのクラブチームとしては中体連の大会には出られないので、中2で部活が終わった場合、年度途中にクラブチームへ移籍できないため、中2の8月から中3の3月までは大会に出られない状況になるのでは。

[事務局]

今、中体連でその辺の特例ルールを検討しています。今年度については、市の施策（実証事業など）で年度途中に移行する場合の移籍は認められる方向になりつつあります。手続きは必要ですが、不可能ではなくなっています。令和6年度はできなかったのですが、中体連もルール作りを進めていると聞いています。子どもたちにとって移行がマイナスにならないよう中体連も考えてくださっていると。そのあたりも注視しながら進めたいと思います。

[質問者 2]

令和7年4月から中1になった子の親です。西脇南中学校の剣道部に入りたくて南中学校に入学しました。するといきなり剣道部は地域移行の対象だと言われました。大人の事情で地域移行になり、剣道と陸上を対象になるというのは、どのように決められたのでしょうか。まずそれを聞かせてください。

[事務局]

市内各中学校に様々な部活動がありますが、その中でも今回、陸上競技と剣道を選んだのは、地域での活動として地域の方にお世話になる関係で、協力いただける方が剣道と陸上競技にいらっしやっただけのためです。そのため、今年度はこの2つを実証事業として進めたいと考えています。

[質問者 2]

それならば、なぜ入学前に、対象となる可能性や、希望する生徒・保護者への説明が一度もなかったのでしょうか。わざわざ剣道部に入りたい、スポーツ少年団から南中の剣道部を目指す我が子が、突然「地域展開になります、休日は違う人に教わります」と言われたら、混乱するのは子どもたちです。保護者や教員の働き方改

革も分かりますが、一番影響を受けるのは子どもではないでしょうか。その点はどうお考えですか。

[事務局]

話にあったとおり、まず休日から進めます。平日と休日で指導者が違うことも想定されます。その点については、指導者同士が連携を取り、情報を密にしながら進めていきたいと考えています。

[質問者 2]

陸上関係、剣道関係の方々が多く来られていると思いますが、大変失礼かもしれませんが本音を言います。陸上競技はある程度、小学校からの西脇ジュニア陸上クラブという母体がしっかりしているので、うまくやっているといます。しかし剣道は母体が全くしっかりしておらず、剣道スポーツ少年団の方や先生方にも話がまとまっていない、話すら来ていないと聞いています。そんな状態で本当に秋から、剣道で子どもたちの安心安全な活動の維持が可能という保証は確実にあるのでしょうか。

[事務局]

確実な保証というよりは、学校の先生も地域の指導者も、当然連携を取りながら進めます。こちらとしても、学校や地域で指導いただける方と調整を進めながら、まずは今年度進めていきたいと考えています。

[質問者 2]

では、秋からは間違いなく子どもが現状維持の活動ができると期待して、まだ仮入部ですが、入部させて本人が3年生の夏まで頑張れるよう見守りたいと思います。

[質問者 3]

「よくある質問」(9)で、「地域指導者が確保できた部活動から優先します」とあります。私は柔道が専門で、地域移行の際に指導者として地域クラブを立ち上げようと考えているのですが、これを見ると柔道は令和9年度までに手を上げられないのでしょうか。

[事務局]

まず、現在中学校で活動している部活動からと考えています。現在活動している子どもたちが、同じ種目を続けられるよう、その種目の整備から進めたいからです。柔道についても、指導いただけるとは大変ありがたいことです。柔道が移行しないわけではなく、将来的には柔道に限らず、様々な競技で活動を広げる場を作りたいと考えています。

[質問者 3]

では、令和9年度までに、柔道は手を挙げる権利がないということですか。

[事務局]

現在考えているのは、令和9年度までは今、学校にある部活動からということです。ただ、地域の方が手を挙げてくださっていることもありますので、その点はまた持ち帰って検討します。

[質問者4]

そもそも平日の部活動は全員参加なのですか。

[事務局]

部活動への参加は任意ですので、全員が参加しなければいけないものではありません。

[質問者4]

では、平日の部活動には参加せず、先ほど柔道の方が言われたように、地域のスポーツ団体や音楽、文化連盟などの活動に参加することも、特に時期を問わず、現時点でも可能という認識でよろしいですか。

[事務局]

はい、それで大丈夫です。

6 お礼のことば

[事務局]

森田先生、本日は部活動の地域展開につきまして、貴重なご講演を賜り、誠にありがとうございました。少子化が急速に進む中、我が国は社会のあらゆる分野で、これまでとおりの姿を維持することが困難になっています。部活動の地域展開も例外ではありません。このような背景のもと、本日、森田先生から豊富なご知見をいただいたことは、私たちに多くの示唆を与えてくださいました。特に「これまでとおりの部活動が地域に移行するのではない、展開していくのだ」「無理せず支え合える地域での体制づくり」など、地域一体で連携していくことの大切さを、大変わかりやすく教えていただきました。

本日のご講演で得た知見をもとに、これからの部活動の地域展開において、本市ならではの目指す姿を描いてまいります。

ご多忙の中、本日ご参加いただいた皆様にも厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご理解ご協力賜りますよう、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

7 閉会

[事務局]

以上をもちまして閉会とさせていただきます。ありがとうございました。